

「希望の首」

脚本 .. 宮下
健作

【登場人物】

○磯野 絢斗（22）

大学卒業後、父親が社長を務める会社に入社した青年。
オシャレ好きで、本当は服飾関係の仕事に就きたいと思っているが自分に跡を継がせようとしている厳格な父に言えないでいる。
それでストレスが溜まり、その苛立ちを温厚な母・知里に向ける。
親友の宗祐や悠馬の前では、リーダー的存在。出来心で行ったホームレス狩りで悪夢を見る事に。

○松丸 宗祐（22）

絢斗の幼馴染で陽気な青年。
大学卒業後は就職浪人をしており、就活中。
都市伝説好きで、変な迷信を信じている。
父が海外出張で不在の為、看護師の母・さゆりと2人暮らし状態。
外では気が弱いが、家では母に強気の内弁慶。
絢斗に乗せられるまま、ホームレス狩りに参加する。

○片山 悠馬（23）

関西出身の1人暮らしで、絢斗の大学の同級生。
現在はバイトしながらプロフットサルの選手を目指しているが、思うようにいかずに苛立つ毎日を過ごしている。
3人の中で1番喧嘩っ早く、腕っぷしが強い。
絢斗が始めたホームレス狩りに関わる事になる。

○磯野 知里（43）

絢斗の母で専業主婦。

絢斗の苛立ちに気づきつつも、
温かく見守っている。

○松丸 さゆり（44）

宗祐の母で看護師をしている。

就職浪人の宗祐に小言を言いつつも
心配している。

○磯野 仁志（47）

絢斗の父で、会社経営をしている厳格な人物。

絢斗に期待する余り、過度のプレッシャーを
息子に与えている事に気づいていない。

○沼田 翔太（28）

真久公園で炊き出しをしているボランティア。

○石黒 かおる（52）

真久公園を根城にしている女性ホームレス。

○吉野 丈男（23）

悠馬のフットサルチームのキャプテン。

○佐藤 卓也（35）

絢斗の上司で、仁志に媚び売っている。

○河野 亜季（48）

ニュースサイト『REPORT NOW』の
女性記者。

○石田 陽子（45）

炊き出しのボランティアに参加している女性。

○篠崎 瞳（21）

炊き出しボランティアを始めた女性。

○ホームレス（？）

絢斗達の狩りの標的となるホームレス。

○香月 明（55）

炊き出しのベテランボランティア。

○カップル男

○カップル女

○警官 A

○警官 B

○やじ馬男①

○やじ馬男②

○中年警官

1 地方都市 とある町の情景（夜）

ハロウィンで賑わう町。

2 真久（まく）公園 人気のない一角

雨が降り出す中、不機嫌な顔で歩く男

Ⅱ 沼田 翔太（28）。

と、背後でケラケラ笑い声がする。

沼田「？」

振り返る沼田の視線の先、ウサギのマスクを被った『何者か』（*以下ウサギ）がいる。

沼田「誰？ハロウィンなんか興味ねえよ」

ウサギが沼田に迫ると、手にした刃渡り

30センチ程のグルカナ이프を真横に振る！

× × × *時間経過

雨上がりの夜空の下、仮装した若いカップルがやってくる。

女 「えー？ここでえ？濡れちゃうよお（笑）」

男 「関係ねえって。な？いいだろ？」

互いを貪り合いながら、草むらに倒れる

カップル。

と、激しい異臭に顔をしかめる。

2人の真横に首のない人間（沼田）の

血塗れの死体が！

カップル「（絶叫）！！」

*カメラは、叫ぶカップルから地を這う様に奥の高台へ。

3 同上の高台

入口の看板に
『倒木の恐れある為、立ち入り禁止』とある。
その奥に、“逆さ帚の形”に見える枝木だけの
大木がある。
それをウサギが見つめている。

4 磯野家 外観

セダンとSUVが停まっている。

5 同 1F ダイニング

テレビのローカルチャンネルが、ハロウィンで
賑わう地元の風景を伝えている中、夕食を摂る

磯野絢斗（22）と父の仁志（47）、

母の知里（43）。

父の様子を窺い、何か言いたげな絢斗。

絢斗「（意を決し）あの、父さんー」

仁志「（遮り）絢斗。細かいミスが多いそうだな？」

佐藤が心配してたぞ」

怒気を孕んだ仁志の声色。

絢斗「（ドキッ）え？」

仁志「皆に恥ずかしくない働きを見せろって

普段から言ってるだろ！？」

怒鳴りつけてくる仁志に委縮する絢斗。

絢斗「・・・わかってる」

仁志「そんな事じゃ俺の跡を継ぐなんて出来ないぞ！

いいか？俺の顔に泥を塗るような真似は絶対にするな！」

絢斗「・・・はい」

知里「大丈夫。絢斗なら出来るわよ。ね？」

絢斗「（イラっとして）・・・」

仁志「（知里に）仕事は結果が全てだ。

出来もしない内に甘やかすな！」

知里「・・・ごめんなさい」

絢斗「ご馳走様」
知里「もういいの？全然食べてないじゃない」
絢斗「食欲無くて。ちょっと散歩してくる」
上着を手に出ていく絢斗を心配そうに見送る知里。
知里「・・・あなた。あの子にあまり
プレッシャーかけない方が」
仁志「プレッシャー？」
知里「最近、特に顔が冴えなく見えて」
仁志「考え過ぎだ。会社でも、社員達に特別扱いするなど
言ってる。あいつの為なんだ。お前もさっきみたいに
甘やかすなよ」
知里「・・・はい」

6 同 前↳傍の道

玄関から出るなり、大きく息を吐く絢斗。
歩き出し角を曲がると、目の前に気味悪い
老婆が！

絢斗「(驚き)！！」
老婆「のマスクを脱ぎ、笑顔を見せる
松丸 宗祐(22)。」

宗祐「ビックリした？」
絢斗「(ホックとして) ふざけんなよ。
幼馴染じゃなきやブン殴ってるぞ」

両親(特に父)には見せない、不躰な態度を
見せる絢斗。
宗祐「怖いこと言わないの。ハロウィンだよ？」

並んで歩く絢斗と宗祐。
道路を挟んで絢斗達と同方向、横並びで歩く
通行人がいる。
それを見て、立ち止まる宗祐。

絢斗「(立ち止まり)? どうした？」
宗祐の目を追い、対岸の通行人に目をやる絢斗。
宗祐「知らない人と横並びで歩くといい事ないから」

悠 斗「(ため息) またお前だけの迷信かよ」
宗 祐「(首を振り) 俺にとっては良くない事が
起こる前兆なの。この前も横に知らない人が歩いてたら、
自転車にぶつけられたし」
悠 斗「(呆れて) もういないから行こうぜ」
宗 祐「会社的事、親父さんに言ったの？」
悠 斗「・・・いや」
宗 祐「まあ、言えないよなあ。大学出るなり無理やり
入社させられたとはいえ、社長の息子がー」
悠 斗「(遮り) 他人事だと思っただけで、就職浪人」
宗 祐「好きで浪人してんじゃないよ」
悠 斗「俺だって早く仕事決めたいよ」
悠 斗「この前、採用面接行ったんだろ？」
宗 祐「うん。もう結果の通知きてもいい頃なんだけど」
悠 斗「まだ連絡ないって、また落ちてんじゃないか？」
宗 祐「やめてよ。そしたら、母親の小言が
またパワーアップしちゃうよ」

7 コンビニ前

悠 馬「スマホでフットサルの動画を見ている
片山悠馬(23)。
不安な顔で右足に目を落とすと、
悠 斗と宗祐がやってくる。」
悠 馬「(気づいて) 呼び出しといて遅いわ」
悠 斗「悪いいな。ビール奢るからさ」
悠 馬「いらん。試合近いから、禁酒中や」
悠 斗「そっか。来月だろ？いけそうか？優勝」
悠 馬「ん？・・・まあな」
宗 祐「大学出ても、バイトしながらフットサル1本で
頑張ってるんだ。」
悠 馬「悠馬なら絶対優勝して、プロのスカウト絶対来るよ」
悠 馬「・・・で、こんな夜に集まって何すんねん？」

宗祐が絢斗・悠馬と並んでスマホを
自分たちに向ける。

宗祐「ほら、ハッピーハロウイン（笑）」
3 S 写真撮る宗祐。

悠馬「（醒めた目で）まさか、記念写真撮る
為だけに呼び出したんちゃうよな？」

絢斗「違うって（笑）。ちよい待ちで」
悠馬「？」

宗祐がバッグからタブレットを取り出すと、
世の中の様々な伝説・迷信が載った
アングラサイトを開く。

宗祐「じゃあ暇つぶしに面白い話を。」

悠馬はこの町の、知る人ぞ知る伝説知ってる？」

悠馬「は？ヨソ者の俺には知らん事だらげや」

宗祐「真久公園の上に、昔から人が立ち入らない
高台があるだろ？あそこにある通称・『逆さ帚の木』の
下に人間の頭を4つ埋めると、埋めた人の想い人が
蘇るっていう話」

悠馬「4つの頭を埋める？」

宗祐「昔、男が首を刎ねられて殺されたんだ。

けど、その首は見つからなかった。

気が触れた恋人の女は、犯人達を含めた4人の頭を
恋人の眠る木の下に埋めたんだ」

悠馬「4人て、殺された連中には当然やけど、願う女に
とつても縁起悪い数字やな」

宗祐「死ぬの『4』（し）』だから？違う、
4は縁起のいい数字なんだ」

悠馬「ほんまか？」

宗祐「4つ葉のクローバーを見つけると
幸せになるっていうだろ？

4はし（死）を連想させる、なんてのは
ダジャレの極みじゃん」

悠馬「日本では陰陽師やらなんやら言うて、
偶数は割れるから縁起悪いんちゃう？」

宗 祐「じゃあ、なんで日本は四季なんて、季節を4つに分けたのさ？」

悠 馬「(口詰まり)で、その男は復活したんか？」

宗 祐「(自慢げに)もちろん。復活した！って書いてある」

悠 馬「(呆れて)アホらし。見た奴おるんか？」

宗 祐「そりゃ、見た人は知らないけどさ。」

実際、木は太古の昔から聖なるモノとして

崇められていて、『逆さ帚』もかつては

『命を宿す木』として信奉されてたんだって」

悠 馬「『かつて』言うのが怪しい。」

宗 祐「そんなん信じる奴の気が知れんわ」

悠 馬「俺は信じるよ。それがどんなにバカバカしくて

ありえない話でも、信じる人にとっては真実なんだよ」

悠 馬「じゃあ、そんなん信じとる奴は、

中々のヤバイ奴ってことやな」

悠 斗「・・・叶わない希望なんて、持つだけ無駄なものにな」

と、道路の向こうにレインコートを羽織った

ホームレス(以下、レインコート)の

姿が見える。*顔は見えない。

悠 斗「よし」

レインコートを追い、歩き出す悠斗と

後続く宗祐。

悠 馬「あ、ちよい待てや」

8 道く真久公園 入口近く

レインコートの後を尾ける悠斗達。

悠 斗「やっぱ真久公園が根城だな」

悠 馬「おい、何すんねん？」

宗 祐「この辺、ホームレス多くて嫌じゃん？

だから駆除するんだって」

上着のポケットからエアガンを出す悠斗。

悠 斗「別に怪我させる訳じゃねえよ(笑)」

悠 馬「(呆れて)オモチャ使うて。ガキやな」

絢斗「今度、ウチの別荘に来いよ。」

本物（の銃）撃たせてやるよ」

歩く3人の前方、公園の入口に煌々と
灯りが見える。

悠馬「（見て）なんや？」

パトカーや救急車が停車しており、
規制線の向こうで数人の警官が

（S2の）若いカップルから話を聞いている。

宗祐「何があったんだろ？」

奥に張られたブルーシート
の囲いの中から
ストレッチャーが運び出される。

絢斗「（見て）人、死んだのか？」

宗祐「事故かな？それともー」

悠馬「殺してか？なら、胸糞悪いわ」

と、遠巻きに現場をジッと眺めていた
レインコートが向きを変えて公園から
離れていく。

絢斗「やべ。逃がすな」

現場を傍で見ていた中年の男Ⅱ香月明（55）
がレインコートと絢斗達に目をやる。

香月「？」

追いかけてよとする香月の元へ

警官Aがやってくる。

警官A「（怪訝に）あなたは？こんな時間になぜここに？」

香月「この公園でボランティアをやってる者です。」

何事か心配で」

警官A「この関係者でしたら、少しお話を

聞かせて貰えますか？」

香月「・・・わかりました」

9 人気のない夜の道

歩くレインコートの後頭部に『ピシピシ』と
BB弾が当たる。

振り向き、エアガンを向ける絢斗達をジッと見据えるレインコート。*顔は見えない

宗 祐「(異様な雰囲気気圧され)・・・怒ってんじゃない？」

絢 斗「(気にせず) ビビんなよ」

レインコートが踵を返し駆け出す。

絢 斗「ほら。逃げた(笑)」

1 0 夜の道々廃ビル 中

逃げるレインコートを追う絢斗達。

やがて、レインコートが廃ビルの中へ

逃げていく。

後に続く絢斗の耳に、階上から足音が。

絢 斗「上だ」

1 1 同 3 F 吹き抜けのフロア

絢斗達がやってくるが、レインコートの

姿は見えない。

悠 馬「もう充分怖がらせたやろ？帰ろうや」

絢 斗「お前だって、ストレス位あんじゃねえの？吐き出せよ」

悠 馬「・・・」

不安そうな表情の宗祐に目をやる絢斗。

絢 斗「まだビビってるのか？お前も早く探せ」

頷くと、恐る恐る周囲を窺いながら

歩を進める宗祐。

と、柱の陰からレインコートが宗祐に

襲いかかる！

宗 祐「うわあああっ！！」

絢 斗 悠馬「!？」

レインコートと纏れる様に倒れ、床に頭部を

強打する宗祐。

絢 斗「!宗祐!!」

悠 馬「何すんねんボケ！」

咄嗟に駆け出し、レインコートの
肩口を右足で蹴る悠馬。

悠馬「(顔をしかめ) 痛っ！」

壁際へ転がるレインコート。

悠馬は右足を庇う様に膝をつく。

絢斗「宗祐！大丈夫か？」

顔面蒼白の宗祐に駆け寄る絢斗。

レインコートは、ヨロヨロと階段を降りていく。

絢斗「(見て) やったな！」

1 2 同 階段へ踊り場

駆け降りるレインコート。

絢斗「クソ、待てよ！！」

後を追う絢斗がイラつき、

エアガンを思い切り投げつける。

それを後頭部に受け、レインコートが

階段を転げ落ちる。

踊り場に叩きつけられ、うつ伏せで

倒れるレインコート。

絢斗「(見て) ？おい」

微動だにしないレインコートの背中を

足で小突く絢斗。

絢斗「おい・・・冗談やめろよ、オジサン」

頭部からの出血が見える

レインコートのフードを外す絢斗。

絢斗「(見て) え？」

足を引き摺った悠馬がやってくる。

絢斗「・・・女だ」

悠馬「なんやと？」

頭から血を流して倒れている中年女を凝視する

絢斗と悠馬。

悠馬「なんちゅうこっちゃ・・・」

絢斗「ピクリとも動かねえんだよ・・・」

うっ伏せた中年女の背中に耳を当てる悠馬。

絢「(息を呑み)」

悠馬「・・・あかん。死んどる」

絢斗「え!？」

悠馬「何したんや?」

絢斗「逃げるから銃ブツけたただだよ。

そしたら転げ落ちて・・・」

1 3 同 3 F 吹き抜けのフロア

頭を押さえ座り込む宗祐。

傍らに写真が落ちている。

宗祐「(手に取り)」

写真には、母親と思しき女性と

幼い女の子が写っている。

そこへ、絢斗と悠馬がやってくる。

絢斗「宗祐、逃げるぞ」

宗祐「?」

1 4 同 階段へ踊り場

降りてくる絢斗達。

宗祐「な、何があったの?」

何も答えず先頭を進む絢斗の足が突然止まる。

絢斗「・・・嘘だろ?」

踊り場には誰もいない!

悠馬「・・・消えとる。どういうこっちゃ?」

絢斗「悠馬、生きてたんじゃねえかよ」

悠馬「アホ。確かに心臓動いてなかったわ」

宗祐「!? 心臓動いてなかったって、どういう事!？」

絢斗「じゃあ、なんでいないんだよ!？」

ついさっきまでココにいたのに! お前が勘違いすっから

逃げられたじゃねえか!？」

悠馬「俺のせいや言うんかい!？」

お前がオバはんを階段から転げ落とすからやろ!？」

絢斗の胸倉を乱暴に掴む悠馬。

宗 祐「ちょっと待って、女!？まずいよ、

警察に駆けこまれてもしたら!」

悠 馬「・・・帰る。どげや!」

絢斗を強く押し退け、一人去っていく悠馬。

宗 祐「ヤバイよ。俺らも早く逃げよう」

絢 斗「・・・」

1 5 人気のない夜の道

早足で歩く絢斗と宗祐。

絢 斗「・・・心配すんな。あの辺には監視カメラもないし、
ダニが警察に駆け込んだところで何も起きねえよ」

宗 祐「階段から落としたなんて。しかも女でしょ?
やり過ぎだよ・・・」

バツの悪い絢斗の足が止まる。

絢 斗「(ハッとして)銃忘れた」

宗 祐「え!？でも、階段では見なかったけど」

絢 斗「くっそ、パクられた!あの女・・・」

宗 祐「それヤバくない!？警察に持ってかれて
証拠とかになったら」

絢 斗「・・・あんなモンで足つかねえよ。

あの女がどっかに売り捌いて終わりさ」

宗 祐「ホントに?明日、警察来たりしたら
シャレにならないよ」

絢 斗「・・・この事は絶対誰にも言うなよ?」
宗 祐「う、うん」

1 6 磯野家 1F リビング 玄関

スマホで息子の番号を鳴らそうとする知里。
と、玄関の方で音がする。

知 里「!」

知里が玄関に行くとき、絢斗が靴を脱いでいる。
知里「遅かったじゃない」
絢斗「……ごめん」

知里「父さんも寝たわ。あなたも早く寝なさい」
無言で階段を上る息子に再び声を掛ける知里。

知里「絢斗」

絢斗「（振り返り）？」

知里「あんまり頑張り過ぎなくていいからね」

絢斗「……」

知里「大丈夫。あなたなら父さんの期待に応えられるから」

絢斗「……全然わかってないよ」

知里「え？」

黙って出ていく絢斗。

知里「……」

1 7 同 2 F 絢斗の部屋

デスクの引き出しを開ける絢斗。

中には、ファッション雑誌や絢斗デザインの

服が描かれたスケッチブックが。

それらをデスクの上に放る絢斗。

絢斗「……くそ」

1 8 同 外観（日替わり…朝）

1 9 同 1 F ダイニング

寝不足気味な顔でやってくる絢斗。

キッチンの知里が顔を向ける。

知里「おはよう。早くご飯食べなさい」

絢斗「……コーヒーだけでいい」

朝食を摂る仁志が、新聞に目を

やっただまま口を開く。

仁志「遅いぞ、さっさと食え。じゃなきや仕事に

身が入らんぞ」

絢斗「・・・うん」

玄関のチャイムが鳴る。

絢斗「？」

仁志「こんな朝早くに誰だ？絢斗、出てくれ」

絢斗「・・・」

インターフォンモニターを覗く絢斗。

画面の中に2人の警察官が！！

絢斗「！！」

固まる絢斗。

知里「誰？」

絢斗「・・・警察」

仁志知里「ええ？」

慌ててモニターに駆け寄る知里。

その傍ら、緊張する絢斗。

知里「(モニターに) はい」

警官B「藤月西署の者ですが」

知里「なんででしょうか？」

絢斗「(ドキドキ)・・・」

警官B「昨晚、この界限でホームレスの誘拐未遂が起きて。

何か不審な人物など見かけなかったでしょうか？」

知里「いえ。うちは特に」

警官B「もし何か見かけましたら、警察の方へご連絡ください」

知里「わかりました」

通話が切れ、小さく安堵する絢斗。

仁志「誘拐未遂だった？」

知里「ええ。怖いわ」

と、テレビからキャスターの声が。

キャスター「昨夜、藤月市の真久公園で頭部のない

遺体が発見されました」

絢斗「？」

テレビは現場の様子と男(沼田)の写真を

映し出している。

キャスター「指紋などから、遺体となったのは

自営業の沼田翔太さん28歳で、沼田さんは現場となった公園で炊き出しのボランティアを行っていました。

なお、沼田さんの頭部は見つかっておらず警察はその捜索並びに容疑者の特定に急いでいます」

仁 志「これもこの界限じゃないか。

何が不満でこんな事件を起こすんだか。

こういう犯罪者に限って、普段本当の姿を見せんからタチ悪い」

絢 斗「・・・」

2 0 絢斗の勤める会社 外観

『磯野物流』とある。

2 1 同 オフィス

作業が手につかない絢斗。

そこへ上司〓佐藤 卓也（35）が書類を手にやってくる。

絢 斗「（気づいて）佐藤さん」

佐 藤 「絢斗君。出してくれた見積り、また間違ってるよ」

絢 斗 「え？すみません」

佐 藤 「もうこんなミスは、いい加減になくそうね。」

社長も心配してるよ」

他の社員達も顔こそ向けないが

笑っている様に見える。

勝ち誇った顔で去っていく佐藤。

絢 斗「（呟く）親父に媚びばっか売りやがって。チクリ野郎」と、スマホが鳴る。

2 2 同 廊下

スマホを手に出てくる絢斗。
絢斗「(出て) どうした？」

2 3 宗祐の家 外観

宗祐の声「(緊迫気味) 絢斗、大丈夫？」

2 4 同 2 F 宗祐の部屋

絢斗の声「(驚き) え！？何かあったのか！？」

宗祐「・・・いや。何もないけど」

*以下、絢斗とカットバック

絢斗「(深く息吐き) ビックリさせんなよ。

それより、ニュース見たか？

ゆうべの公園の事件、殺しだったな。

しかも首が無いんだってよ」

宗祐「(驚いて) そうなの？」

絢斗「ああ。お前のオカルト話みてえだ」

宗祐「・・・それよりさ、俺やっぱ心配で。

なんか手を打たなくていいのかな？」

絢斗「手え打つって、こっちからわざわざ名乗り出て

『ごめんなさい』とでも言うのか？バカ言うなよ」

宗祐「でも・・・」

絢斗「戻んねえと、ムカつく上司に嫌味言われっから切るぞ」

通話を切る絢斗。

宗祐「(不安で)・・・」

2 5 真久公園 上の高台(夜)

香月「・・・」 『逆さ帚』を見つめる香月。

2 6 真久公園 一角(日替わり..昼)

マスクと帽子姿の宗祐の視線の先、炊き出しが行われている。

列に近づき、昨夜見たレインコートの姿を
探す宗祐。

宗 祐「・・・」

と、背後から肩を強く掴まれる。

宗 祐「（ビクッ）？」

振り返ると、ホームレスの中年女Ⅱ石黒 がおろが昏い目を宗祐に向けている。

かおる「あんた、見ない顔だね？」

宗 祐「いや、俺は・・・」

かおる「この辺、ウロチョロしない方がいい」

宗 祐「え？」

かおる「昨夜、あんた位の若いホームレスが

攫われそうになったんだよ」

宗 祐「・・・攫われる？」

かおる「前も、ここに来てた若い男が消えてね。

けど、ホームレスが消えたくらいじゃ警察は

動いてくれやしない。だから、あんたも酷い目に

遭う前にここから消えな」

苦々しい表情で去っていくかおる。

宗 祐「・・・」

と、カレーをプラ容器に盛り付けている

ボランティアの女性Ⅱ石田 陽子（40）と

篠崎 瞳（20）が宗祐に笑顔を向ける。

瞳 「そちらの方もどうぞ」

陽 子「順番に並んでくださいねえ」

宗 祐「え？お、俺はー（違います）」

列から離れ、歩き出す宗祐。

と、買い物袋を抱えた香月が目の前に現れる。

宗 祐「な、なんですか？」

香 月「昨夜（ゆうべ）ここに来なかったか？」

宗 祐「！」

逃げ去っていく宗祐を見送る香月。

瞳 「香月さくん、お買い物ありがとうございます（笑）」
香 月 「・・・ああ」

2 7 宗祐の家 1F リビング

出勤の支度を終えた宗祐の母Ⅱさゆり（45）。
と、宗祐が帰ってくる。

さゆり 「部屋に籠りつきりと思っただら急に出かけて。

どこ行ってたの？」

宗 祐 「・・・散歩。本屋とか色々」

さゆり 「（ため息）この前（採用試験）の結果、まだこないの？」

宗 祐 「うん。まだ」

さゆり 「きたらちゃんと教えるのよ。それと、

さつきフィリピンから電話あって、お父さんそのまま

タイに出張だって。宗祐の就職は決まったのか？って。

また心配してたわよ」

宗 祐 「・・・今度は大丈夫だよ！」

さゆり 「だといいいけど。じゃあお母さん、急だどこれから

夜勤だから。休みなのに駆り出されて、ほんと

ウチの病院最悪」

玄関へ向かうさゆり。

宗 祐 「忘れ物だよ」

宗祐が指さす先、テーブルの上にスマホがある。

さゆり 「いけない、すぐ忘れちゃう」

スマホを手に出していくさゆりを見送ると

力なくソファに座る宗祐。

テーブルにスマホを置くと、拾った

母子の写真をポケットから取り出す。

宗 祐 「（見て）・・・」

2 8 同 （時間経過・・・夜）

窓外は強い雨。

床に写真が落ちている。

電気の点いてない部屋で眠ってしまったている
宗祐。

と、ケラケラ笑い声が聞こえる。

宗祐「(ウトウト目を覚まし)？」

顔を上げた宗祐のすぐ目の前、レインコートを
羽織ったウサギがジッとこちらを見ている！

宗祐「！？！」

恐怖で声の出ない宗祐を押し倒すウサギ。

ウサギが突きつけたグルカナイフの切っ先が
宗祐の首をゆっくり真横になぞる。

宗祐「！！」

と、床に落ちている写真に目を留めるウサギ。

ウサギ「・・・」

ナイフを突きつけたまま、手にした写真を
ポケットに入れると、宗祐のスマホを掴み
画面を詮索する。

やがて画面に(昨日撮った)3S写真が現れる。

ウサギ「(見て)・・・」

突然突き飛ばされるウサギ。

宗祐がスマホを奪い玄関に逃げていく。

宗祐「(はあ、はあ)た、助けて！」

背後で起き上がるウサギ。

29 カラオケボックス 表 *時間経過

急いでやってくる絢斗の頭上、雨は止んでいる。

30 同一室

絢斗「？仕返して・・・まさか、嘘だろ？」

ソファに腰掛ける宗祐と絢斗。

宗祐「(首を振り)あのレインコートを着てた」

絢斗「(首を振り)あの中年の女だったか？」

宗祐「(首を振り)ウサギのマスクをしてたからわかんない」

宗 斗「マスク？ていうか、なんで家がバレたんだよ？」
 宗 祐「・・・昼間、あの公園に行ったんだ」
 宗 斗「なに？」
 宗 祐「勝手に行っでごめん。その時、後尾けられたのかも」
 宗 斗「で、何された？見た感じ、何もねえけど」
 宗 祐「首を両手で擦る宗祐。」
 宗 祐「ナイフで首を切られそうになっただけど、外に逃げたら
 宗 斗「立派な犯罪じゃねえか。警察に言えよ」
 宗 祐「・・・俺たちのやった事も犯罪だよ？」
 宗 斗「バレちゃってもいいの？」
 宗 斗「（言葉に詰まり）」

宗 祐「・・・」
 宗 祐「（ぼそりと）あの伝説に倣ってたりして」
 宗 斗「？伝説？」
 宗 祐「・・・なんでもない」

宗 祐「・・・」
 宗 祐「手元のタブレット（『逆さ帚の記事』）に
 目を落とす宗祐。」

宗 祐「・・・」
 宗 祐「モニターテレビで沼田の
 首切り事件の続報が流れている。
 それを見ている絢斗と宗祐。」

宗祐の首をなぞるグルカナイフ。
 × × ×

3
 1 同 （*日替わり..日曜日 早朝）

眠っていた絢斗が目を覚ます。

絢斗「(驚き) ずっと起きてたのか？」

憔悴した顔で頷く宗祐。

絢斗「心配すんな。きつと悪戯だったんだ」

宗祐「そうかな？俺、キッチンと謝りたいよ。

怖いのは嫌だよ」

絢斗「・・・帰ろうぜ？俺、仕事だからさ」

宗祐「もう少し、ここにいる」

絢斗「・・・」

財布から出した札をテーブルに置く絢斗。

絢斗「じゃあ、またな」

宗祐「(意味ありげに) 悠馬にもよろしく」

絢斗「・・・」

3 2 磯野家 外観

3 3 同 1 F ダイニング

急いでやってくる背広姿の絢斗の頬を

いきなり張る仁志。

絢斗「！！」

仁志「外泊するなら連絡しろ。

全く、父親より遅い出社なんて。

俺に恥をかかせるな、と言ったよな？」

絢斗を睨みつけ、出社していく仁志。

絢斗「・・・」

目玉焼きとトーストをテーブルに置く知里。

知里「ほら、今からなら間に合うから」

俯いて席に着く絢斗。

知里「絢斗」

絢斗「？」

知里「会社嫌なの？」

絢斗「！」

知里「嫌なら、父さんに言いなさい。」

母さんも味方するから」

絢斗「……別に大丈夫だよ」

出ていく絢斗。

知里「……」

3 4 絢斗の会社 オフィス

デスクで作業する絢斗。

絢斗「……」

3 5 同 屋上（昼休み）

スマホで悠馬の番号を鳴らす絢斗。
だが、応答はない。

絢斗「……」

3 6 真久公園 一角（夜）

陽子「レインコート着たホームレスの女性？

ああ、絹江さんかしら」

絢斗「絹江さん？今ここにいますか？」

ボランティアの陽子と話すマスク姿の絢斗。

陽子「（辺りを見て）いないですねえ。昨日は見たんだけど」

絢斗「昨日？どんな感じでした？」

陽子「どんなって、元気でしたよ。彼女が何か？」

絢斗「いえ。会えたら、ちよっと話があった」

陽子「（キョトンと）話？」

そこへ、昏い表情をした1人の中年女性

。 Ⅱ 河野 亜季（48）が2人に近づいてくる。

亜季「すみません。私、ニュースサイト

『REPORT NOW』の河野と申します」

陽子「はい？」

亜季「先日ここで起きた殺人事件について
取材してまして。何かご存じの事がありましたら

陽子「お話聞かせてもらえませんか？」

「じゃあ、夜回りに行くんで」

陽子が愛想よく頭を下げて去ると、
絢斗に伺いの目を向ける亜季。

絢斗「いや、俺も分かんないですから」

その場を離れる絢斗。

亜季「（見送って）」

37 フットサルコート（夜）

激しいプレイの中で汗を流す悠馬。

悠馬「痛（っ）っ」

右足を庇い動きが止まってしまふ

悠馬に、チームメイトの

吉野 丈男（23）が駆け寄る。

吉野「どうした片山？」

悠馬「・・・なんでもない。大丈夫や」

× × ×

『お疲れ』の声が響く。

他の選手達から離れたベンチに座り

右足を気遣う悠馬。

そこへ絢斗がやってくる。

絢斗「何度も電話鳴らしてんのによ」

悠馬「ムカつく奴の電話なんか出るかい」

絢斗「・・・ちよっといいか？」

悠馬「ここで言え」

辺りの選手たちに目をやる絢斗。

絢斗「ここじゃ言えねえから、頼んでんだ」

悠馬「？」

38 同 人気のない一角

悠 馬「宗祐が？」

頷く絢斗と対峙する悠馬。

絢 斗「あん時の、レインコート着てたって」

悠 馬「偽モンや。あのオバはんは死んでた」

絢 斗「偽モンなら、宗祐を狙う理由は？」

それに死体はどこだよ？さっき公園で聞き込んだら

あの女の名前は絹江つつつて昨日も公園にいたってよ」

悠 馬「(言葉に詰まり)・・・で、宗祐は？」

絢 斗「大丈夫だ。けど、お前も念の為注意してー」

悠 馬「(遮り) 注意するもなにも、

向こうは俺らの事なんも知らんやろ？」

絢 斗「宗祐は家、突き止められたんぜ？」

ウサギのマスク被ってたってー」

悠 馬「(遮り) 知るか。そもそもお前が

あんなバカな事カマスからや」

絢 斗「・・・」

そこへ吉野がやってくる。

吉 野「片山、ちょっと話があんだけどいいか？」

悠 馬「え？おう。(絢斗に) お前とは、

もう友達ちゃう。この話も終いや」

去っていく悠馬。

絢 斗「・・・勝手にしろ！」

39 人気のない夜の道

強い雨が降り出し、

急ぎ足で歩く絢斗。

突然、後頭部に『バキッ』と

硬いモノが投げつけられる。

絢 斗「痛っ！」

後頭部を押さえ、膝をつく絢斗。

振り返ると、地べたに(絢斗の)

エアガンが落ちている！

絢斗「！」

と、ウサギが暗闇の中から現れ、絢斗にマウントを取ると、その首にグルカナイフを突きつける。

絢斗「！あ、謝るよ！仲間も反省してるんだ！」

恐怖で固まる絢斗の首に押し付けられるナイフの切っ先。

絢斗「があっ！（息を呑む）」

と、遠くから2人を包む灯りが。

絢斗「？」

灯りの出先とは反対方向に踵を返し

走り去るウサギ。

ヘッドライトを灯した車が、怯える絢斗に

気付くことなく、その脇を通過して行く。

絢斗「（ガクガク震えて）」

4 2 磯野家 玄関く階段

外を窺いながらドアを閉め、鍵を掛ける絢斗。
そこへ、知里が駆け寄る。

知里「（驚き）びしょ濡れで、どうしたの？」

絢斗「・・・明日から会社、行きたくない」

知里「明日？急には無理でしょ？」

まずは父さんに相談しないと」

絢斗「・・・俺の味方じゃないのかよ？」

出来ないなら言うな！」

浴室へ消える絢斗。

知里「・・・」

4 3 同 1 F 浴室

熱いシャワーを浴びる絢斗。

絢斗「くそ、何で俺の事が（バレたんだ？）」

首についた傷を触る絢斗。

×

×

×

*ランダムにフラッシュバック。

○押し付けられるナイフ。

○宗祐「あの伝説に倣ってんのかな？」

○沼田の事件を伝えるニュース。

×

×

×

絢斗「(愕然と)嘘だろ?.....」

4 4 真久公園 一角(日替わり..昼)

ハロウィン仮装イベントが行われている。

その外れ、数人のホームレスを品定め

しながら歩く悠馬。

悠馬「(イライラして)どこにおんねん.....」

前方から女ホームレスのかおるがやってくる。

かおる「.....」

怪訝な表情を見せながら悠馬と行き交うかおる。

悠馬「(見送って)何やあの女?」

と、悠馬の右足が痛みで止まる。

悠馬「痛っ」

4 5 フットサルコート(回想)

吉野の後についてくる悠馬。

悠馬「話ってなんや?」

吉野「お前、足を痛めてるだろ?」

悠馬「.....バレたか。けど、心配いらん」

吉野「すまないが、レギュラー外れてもらう。

みんなも賛成してるから」

悠馬「あ?ちよっと待てや!大丈夫言うてんねん!

今度の大会、皆で優勝するって誓ったやろ！？
俺は優勝してプロのスカウトが欲しいんや！」
吉野「それは俺達も一緒だ。だから負けは許されなんだよ」
悠馬「……」

46 真久公園 一角（現在）

悠馬「あのオバはんはんに、責任取らせたる」
イラついた表情で歩き出すと
荷物を抱えた瞳とぶつかる。

瞳「きゃっ」

悠馬「す、すまん！」

しゃがみ込み、瞳と一緒に落ちたモノを
拾い出す悠馬。

瞳「（笑顔で）あ、ありがとうございます」

悠馬「（見惚れて）い、いや……」

荷物を拾い終え、立ち上がる2人。

悠馬「（荷物を見て）き、君はイベントのスタッフ？」

祝日に大変やな」

瞳「ええ、今日は特別で。毎週土曜日は炊き出しの

ボランティアを」

悠馬「偉いなあ。でも、なんでまた？」

瞳「え？（口詰まり）何か人の役に立つ事

したいなと思って」

悠馬「へえ。そういや、この前ここに

パトカーやら警官がぎょうさんおったな」

瞳「ええ。ここで同じボランティアの

沼田さんが人が殺されたんです」

悠馬「殺された？殺人事件やったんか」

瞳「（頷き）首から上が無いんですって」

悠馬「首が？」

瞳「（頷き）こんな事言うの不謹慎ですけど、

沼田さん、良くない噂があったみたいなんですよね」

悠馬「へえ。あ！とここでさ、ボランティアしてんなら

この公園で絹江って女の知らないかな？
「絹江さん？」

そこへ、記者の亜季がやってくる。

悠 馬「(見て) 何なん、あのオバちゃん？」

瞳 「(小声で) 記者さんで、例の事件の

取材でよく来てるんです」

悠 馬「記者？」

亜季が2人の前に立つ。

亜季「(頭を下げ) すみません。私」

悠 馬「(遮り) 記者さんなんやろ？」

あのオカルトな事件調べてんやて？」

亜季「オカルト？」

悠 馬「死体に頭がないって。この上にある

逆さ帚の下にあったりしてな」

亜季「(興味を示し) どういうことですか？」

悠 馬「ん？その木の下に人の頭を4つ

埋めると、埋めた人間が生き返らせたい人が

蘇るっちゅー伝説や(笑)」

亜季「・・・それ、詳しく聞かせてもらえますか？」

悠 馬「いや、俺もダチに聞いただけで詳しくはないねん」

亜季「そうですか。ありがとうございます」

淡々と頭を下げ、去っていく亜季。

悠 馬「(見送り) 根暗な顔して信じんなや」

瞳 「え？冗談なんですか？」

悠 馬「いや、その伝説ってのはマイナーやけど

実際あるらしくて。けど、いくらネタが欲しいからって

そんなありもしない話信じるって。記者っちゅーのは

ほんまゲスイな」

2人の傍を、仮装した仲睦まじい母子が

通りかかる。

それを寂し気に見つめる瞳。

瞳 「・・・記者じゃなくても、そんな話を真面目に

信じちゃう人っているかもしれませんよね」

悠 馬「え？」

瞳 「じゃあ、戻らなきゃなんで」

頭を下げ、去っていく瞳。

悠 馬「あ。絹江ってー（オバはんは？）」

4 7 絢斗の会社 オフィス

スマホで（宗祐が見てた）

アングラサイトを見ている絢斗。

画面には『藤月市の死者を蘇らせる奇跡の木！』とある。

投稿フォームには

『ちょっと大袈裟過ぎ』

『さすがにファンタジー（笑）』

といった否定的な文面が並ぶ。

絢 斗「・・・」

そんな中にも

『昔、実際に人殺して首埋めたって事案があったらしい』、『マジ命を宿す木！』

と肯定的な文面もある。

絢 斗「（呟く）・・・バカじゃねえのか」

と、上司の佐藤がやってくる。

佐 藤 「絢斗君。手が止まってるよ。」

社長がまた心配するから頑張ろう（笑）」

『パンツ！』机を叩き、立ち上がる絢斗。

絢 斗「うるせえっ！親父の腰巾着が！！」

佐藤を殴りつける絢斗。

4 8 真久公園 中 *時間経過

絹江を探し歩く悠馬に

大粒の雨が降り注ぎ始める。

雨を凌ぐようと帰宅の途につく仮装パーティーの

参加者たちが次々と悠馬と行き交う。

と、首に鋭い痛みを覚える悠馬。

悠馬「痛っ？」

反射的に首を押さえる悠馬。
押さえた手には、血が付いている。

悠馬「！！？」

悠馬の首には、一筋の傷が。

悠馬「(振り向き) 誰や？」

と、あの晩のレインコート(の背中)が
人の流れから外れ(人気のない)木立の中へ
消えていく。

悠馬「！あのボケ」

後を追い、レインコートと同様に木立を
抜ける悠馬。

悠馬「どこ行きよった！？」

視線の先に公衆便所が見える。
向かって正面、壁で分かれた男女それぞれの
個室が見える。

悠馬「・・・」

閉められた男子用の個室のドア前に立つ悠馬。
静かにドアノブを掴むと、一気に開く。

悠馬「！」

誰もいない。

拍子抜けして便所を出る悠馬。

突然ウサギがグルカナイフで悠馬に迫る！

悠馬「うおっ！」

反射的に体を捻るとウサギを捕らえ
投げを決める悠馬。

悠馬に放られ、激しく地面に身体を

叩き付けるウサギ。

悠馬は右足に激痛が走り、片膝をつく。

悠馬「ぐっ」

ヨロヨロ起き上り狼狽えるが、動けずに
右足を庇う悠馬の様子に『？』のウサギ。
と、人の声が近くで聞こえる。

悠馬「ま、待たんかい！」
ウサギは地団太を踏み、駆け出す。

悠馬が立ち上がるが、ウサギの姿はもう見えない。

悠馬「くそ」
地面に何かが落ちている。

悠馬「？」
悠馬が手にしたのは、薄紫色をした花のブローチ。

悠馬「……」

4 9 絢斗の会社 社長室→前廊下

仁志の前、直立の絢斗。

仁志「俺に免じて、佐藤は大事にしないそうだ」

絢斗「……すみません」

仁志「俺の顔に泥を塗るなど言ったよな？」

父親に反抗する、それが本当のお前の姿なのか！？」

大声で怒鳴ると、絢斗の頬を思い切り張る仁志。
黙って頭を下げ、廊下に出る絢斗。

絢斗「……」

5 0 宗祐の家 外観（夕）

スマホの着信音が響く。

5 1 同 1F リビング

スマホを耳に当てる宗祐。

宗祐「え！絢斗も！？」

5 2 絢斗の会社 屋上 *以下、宗祐とカットバック

電話している絢斗。

絢斗「ああ、あの女だ。俺の銃持って。首を切ろうとした」

宗祐「首？じゃあ、やっぱり・・・」

絢斗「逆さ帯の伝説。お前もその可能性を考えてたんだろ？」

あのボランテアの事件と俺達の件が

伝説に倣ってるのか、あの高台に行って確かめようぜ。

こんな事、早く終わらせるんだ」

宗祐「・・・わかった」

絢斗「今夜10時。あのコンビニ前な」

5 3 宗祐の家 1F リビング 玄関

通話を切り、ソファに座る宗祐。

宗祐「・・・」

タブレットを手にしたところへ

さゆりがやってくる。

さゆり「じゃあ、お母さん夜勤に行くから」

宗祐「鍵は置いてって。帰ったら絶対、チャイム鳴らしてよ」

アングラサイトを開く宗祐。

さゆりがタブレットを覗き込む。

さゆり「(ため息) ホント好きね。そんな

馬鹿らしいサイト見るのは結構だけど、

面接の結果は？まだ来ないの？」

宗祐「・・・うるさいな。まだだよ！何度も聞かないですよ！」

さゆり「うるさい？心配だから何度も聞いてるんでしょ！」

部屋に籠ったりタブレット見てるばかりで

ほんとに就職する気あるの？」

宗祐「もちろんあるよ！でも、上手くいかないんだよ！！」

さゆり「・・・」

テーブルに鍵を乱暴に置き、玄関に

向かうさゆり。

沈んだ表情で宗祐も後に続く。

宗祐「・・・ねえ。もし俺が死んだら、

生き返らせてくれる？」

さゆり「はあ？何バカな事言ってるの？」

宗 祐「・・・冗談」

さゆり「宗祐。お母さん、あなたに頑張って欲しいから。しっかりね」

宗 祐「・・・」

傘を手に出ていくさゆり。

施錠し、リビングに戻る宗祐。

スマホがメール着信を告げる。

宗 祐「！」

期待してメール画面を開く宗祐。

が、メールには面接を受けた企業からの

『不採用』を告げる文面。

宗 祐「(落胆)・・・」

ふと目をやったテーブルに、

(母が忘れた)スマホがある。

宗 祐「(見つめて)・・・頑張らなきゃ」

スマホで求人情報を見だす宗祐。

と、庭に面した大きな窓の向こう、

ウサギがゆっくり現れる！

宗祐「！！！」

5 4 道

さゆりの足が止まる。

さゆり「あ。またスマホ(忘れちゃった)」

5 5 同 1 F リビングく玄関くリビング

ソファの陰に隠れ、スマホで

グループLINE(絢斗、悠馬)を開き

『あいつが来た』と打ち込む宗祐。

と、玄関チャイムが鳴る。

宗 祐「(まさか、お母さん!?)」

ソファの陰から窓外の向こうを窺うと

ウサギがゆっくり玄関の方を向く。

宗 祐「(お母さん逃げて!)」

玄関に向かうウサギ。

宗 祐「(お母さん!!)」

玄関へ向かい、ドアを開ける宗祐。

宗 祐「お母さん!!!」

宗祐の目の前、目を丸くして立っている郵便局員。

宗 祐「え?」

郵便局員「・・・書留です」

家の周囲をチェックする宗祐。
が、誰もいない。

宗 祐「・・・」

サインし、郵便局員から封書を受け取る宗祐。
バイクで去っていく郵便局員を見送り息をつく
宗祐の背後、ドアが突然開きウサギが現れる!

宗 祐「え」

ウサギが宗祐を羽交い絞めにする
と家の中へ引き摺り込む!

5 6 同 玄関前&中 *時間経過

雨の中、やってくるさゆり。

チャイムを鳴らす
が反応は無い。

さゆり「?宗祐。いるんでしょ?開けて」

何度もチャイムを押すさゆり。

×

×

×

宗祐のスマホを手にするウサギ。
画面にはグループLINE。

5 7 同 1F リビング窓外

さゆり「ちょっと宗祐?いるんでしょ?」

ク

クレセント錠の周囲が割られ
開け放たれた窓を見て足を止めるさゆり。

さゆり「！宗祐？」

家の中に足を踏み入れたさゆりの表情が凍る。

さゆり「！！！」（絶叫）

58 同表 * 時間経過（夜）

雨上がりの夜空の下、絢斗が駆けてくる。

家の前はパトカーや救急車、報道陣とやじ馬で溢れている。

絢斗「宗祐！」

中へ入ろうとするが、規制テープ前の警官に止められる。

と、ヤジ馬男2人の話が聞こえる。

男 ①「この息子、首から上が消えてるって」
絢斗「！」

男 ②「マジ？この前、公園で殺されたヤツも首無かったろ？」
絢斗「（愕然）！！！」

と、現場を見ていた悠馬が踵を返し歩き去るのが見える。

絢斗「悠馬・・・」

悠馬を追う絢斗。

それを離れた所で香月が見ている。

香月「・・・」

59 真久公園 上の高台 逆さ帚の下

木のたもと。土が掘り起こされ、腐敗を始めた沼田の頭部が見える。と、ウサギの背後に亜季が現れる。

亜季「このバカげた伝説を聞いてね。

その途端、また首切り事件が起きたからまさかと思って来てみたけど・・・」

ウサギの足元、沼田の頭が見える。

亜季「(ワナワナ震え) 翔太……」

ウサギ「……」

亜季「あんた正気？こんなふざけた事！！」

スタンガンを手に、雄叫びを上げウサギに

襲い掛かる亜季。

そんな亜季の腕を掴むウサギ。

亜季「！？私の首も切りなさいよ！」

2人が纏れ倒れ込む中、不可抗力で

スタンガンが亜季の身体に押し当り

スパークする。

亜季「ぎゃっ！！」

地面に側頭部を強打する亜季。

ウサギだけがゆっくり起き上がる。

60 道

右足を引き摺り歩く悠馬の後を追う絢斗。

絢斗「悠馬！宗祐のLINE見たろ？あの女の仕業だ」

悠馬「(立ち止まり) 宗祐が死んだのは、おんどれのせいや」

絢斗「！」

悠馬「俺も、今度の大会パーになったわ」

絢斗「え？」

悠馬「あの夜、オバはんを蹴った足の痛みが酷いんや」

振り返った悠馬が絢斗を殴る。

悠馬「お前があんな事さえしなけりゃ！」

絢斗「……本当にすまない。けど、お前も

気をつけなきゃ」

悠馬「……もう遅いわ」

絢斗「え？」

ポケットから花のブローチを出す悠馬。

悠馬「あのオバはんが落としてった」

絢斗「お前も襲われたのか？」

悠馬「お前も？って、おんどれもか？」

絢斗「ああ。宗祐を最初、殺さなかったのも俺達を炙り出す
為だったんだ」

悠馬「・・・あのオバはん、狂っとるわ」

絢斗「この前のボランティアを殺したのも、きつとあいつだ」
悠馬「あ？」

絢斗「知らないか？殺されたボランティアも（嗚咽を堪え）
宗祐も首から上が無い。

きつと宗祐が言っていた逆さ帚の伝説に倣ってんだ」

悠馬「お前、あんな与太話信じんのか？」

絢斗「俺だってパニックってるよ。」

けど、あの女の思考は俺らの理性なんか軽く超えてんだ。
オカルト好きの宗祐はその可能性にいち早く気づいた。
お前は襲われた時、首を狙われなかったか？」

首の傷を見せる絢斗。

悠馬「（ゾツとして）」

悠馬も傷のついた首を見せる。

絢斗「（息を呑み）伝説では、首は4つ埋めるんだろ？」

あいつが誰を生き返らせたのか知らないが

後は俺とお前の首を手に入れようとしてくる筈だ」

悠馬「！！」

絢斗「あの木に行こう」

6 1 真久公園 入口道 *時間経過

絢斗・悠馬「？」
やってくる絢斗と悠馬の前方、警官が数人いる。

中へ入ろうとする絢斗達を

中年の警官が制止する。

警官「今は入っちゃダメだよ」

絢斗「この先の高台に行きたいんですよ」

警官「あーダメダメ。ていうか、あそこは

元々立ち入り禁止だろ？」

絢斗「・・・何があったんですか？」

警官「匿名で通報があつてね。ここに女性が

(口をつぐみ) っ、今はダメだから」

絢斗「・・・なら、高台にある木の下を調べてください！
さっきの首切り事件の被害者の首があるんです！」

警官「？君はなんでそんな事を？」

絢斗「それは・・・とにかくお願いします！」

踵を返し、走る絢斗と悠馬。

警官「あ、おい。待ちたまえ！」

警官から見えなくなったところで歩を緩める

絢斗と悠馬。

悠馬「あんなんで警察、調べるか？」

絢斗「わからない。でも、ああするしか」

と、2人のスマホが同時にLINE着信を告げる。

絢斗「(見て) 宗祐から!？」

顔を見合わせ、スマホを開く絢斗と悠馬。

絢斗 悠馬「(見て)!!」

吐しゃ物を撒き散らす絢斗と悠馬。

スマホの画面には、首の無い血塗れの宗祐が!

6 2

磯野家 玄関く階段下

思い詰めた表情で玄関を上がり

階段に向かう絢斗。

そこへ知里がやってくる。

知里「宗祐君の事聞いたわ。それと、会社での事も

父さんから」

絢斗「・・・」

後ろ手から、絢斗のスケッチブックを出す知里。

絢斗「!」

知里「ごめんなさい。部屋に洗濯物を

持っていった時に見つけて」

絢斗「・・・」

スケッチブックをめくり、絢斗のデッサンを

眺める知里。

知里「ほんとと上手。絢斗にこんな夢があるって知らなかった」
斗「・・・だよ。昔から母さんは父さんの言いなりで

一緒にになって俺に余計な期待ばっか掛けて！
俺の事なんか何も分かってないんだ！」

知里「・・・悪かったわ。でも、絢斗がこうしたいって

希望があるなら今の話、父さんにもちゃんと言いなさい。
会社も辞めさせてもらいなさい、私も応援するから」

絢斗「・・・もう遅いんだ」

知里「一体どうしたの？何かあったなら、母さんに言って」

絢斗「言ったら・・・俺の本当の姿を知ったら

母さんは失望するさ！」

知里「？」

知里の手からスケッチブックを払い落とす

2階に行く絢斗。

知里「・・・」

6
3 真久公園 近くの道（日替わり…朝）

カバンを持った悠馬が立っている。

そこへ瞳が通りかかる。

瞳「（笑顔で）おはようございます」

悠馬「（驚き）お、おはよう」

瞳「（カバンを見て）どこか行くんですか？」

悠馬「・・・ダチの別荘へ旅行に」

瞳「へえ。いいですね。（顔色を伺い）

なんか、元気ないですけど？」

悠馬「え？いや・・・そっちは？

炊き出しは土曜日じゃ？」

瞳「今日は急遽、これから新しいテントの

設営場所の下見です。

昨夜も事件があつて、さすがに公園がしばらく

封鎖されるっていうんで」

悠馬「・・・そうなんか」

瞳 「(頷き) だからこの先で特別に許可貰うらしいです」

2人の傍に、絢斗の運転するSUVが
やってきて停車する。

更に、沢山の荷物を手にした陽子も
笑顔で通りかかる。

陽子 「瞳ちゃん、みんな待ってるから急いでね(笑)」
瞳 「あ、はい。それじゃあ、また」

悠馬に頭を下げ、踵を返す瞳。

悠馬 「・・・あいな！」

瞳 「(振り返り) はい？」

悠馬 「か、帰ったら、ご飯でもどうや？」

瞳 「え？」

悠馬 「いや、無理やったら無理でええねん」

瞳 「・・・」

悠馬 「・・・よ、よく考えてくれ」

ふと、瞳が肩に掛けたトートバッグに
目をやる悠馬。

バッグには薄紫色をした綺麗な花が
差さっている。

悠馬 「・・・その花は？」

瞳 「え?・・・さつき、途中で。」

綺麗な花から摘んできたんです」

悠馬 「・・・綺麗なな」

SUVのクラクションが鳴る。

悠馬 「(我に返り) ほ、ほな」

悠馬を乗せ、発進するSUV。
それを遠くで見送る香月。

香月 「・・・」

64 走るSUV 車内

『昨夜、真久公園で女性の遺体を
発見し身元を確認中』だという
ニュースがカーラジオから流れる。

絢斗「あの女、俺ら以外に標的がいるのか？
けど、首が切られたとも言っていないな」

悠馬「……」
悠馬は上の空。

×

×

×

悠馬が拾ったブローチと瞳が
摘んできたという花がシンクロする。

×

×

×

悠馬「(呟く) 思い過ぎじゃ」
手にしたブローチを見つめる悠馬。

絢斗が怪訝な表情を向ける。

絢斗「おい。そんなモン持って何考えてんだよ？」

悠馬「さっきの娘(こ)の事や。悪いか？」

絢斗「？」

悠馬「足もこんなで、今は夢見る気も失せてんねん。

宗祐もあんな目に。今は

『生き延びてあの娘ともう一度会う』のが俺の希望や」

絢斗「……」

悠馬「それと勘違いすんなよ？」

あのオバはんの手の届かない場所に一時避難するって

いうお前のプランには乗ったが

仲直りした訳やないぞ？」

絢斗「……わかったよ」

と、目の前を誰かが横切る。

絢斗「うおっ！」

急ブレーキを掛け停車するSUV。

悠馬「(窓を開け) アブないやる！」

悠馬の怒声を無視して去っていく人影Ⅱかおる。

かおる「……」

再び走り出すSUV。

悠 馬「ったく、なんやアイツ」
絢 斗「(安堵の息をつき)」

絢斗のスマホが鳴る。

着信画面を見るなり電源を切り

ダッシュボードに放り込む絢斗。

悠 馬「？誰からや？」

絢 斗「・・・母親」

悠 馬「ええんか？」

絢 斗「(頷き) 黙って出てきたから掛けてきてんだ」

悠 馬「そら、息子の事が大事で心配してるからやろ？」

ウチは俺を生んだ代わりにオカン死んどるから

羨ましいわ。

なのに邪険にしよって。それ、甘えん坊って言うんやで」

絢 斗「・・・」

6 5 磯野家 1 F リビング

スマホを手に、不安な表情の知里。

テレビで報じている宗祐殺害のニュースに

目をやる。

知 里「・・・」

6 6 山間の別荘地 情景

6 7 高台上的別荘前

潇洒な建物の前で停車するSUV。

6 8 別荘 1 F リビング

ウッドデッキに面した大きな窓から

陽光が差している。

ソファに腰掛け、テレビで宗祐殺害の続報を

見ている絢斗と悠馬。

『逆さ帚』に関する言及はない。

悠馬「警察は、あの木を調べてないんやな」

絢斗「・・・」

× × ×

(別荘の電話で)電話している絢斗。

絢斗「犯人は50代位の絹江って

女性のホームレスで、真久公園にいます。

後、公園の上の高台にある木の下を調べてください。

犯人はそこに人の頭を埋めてるんです」

警察の声「(笑)あのねえ。お宅みたいな悪戯(の情報)

言ってくる人が多くて、こっちは辟易してんの」

絢斗「本当ですって！」

警察の声「(ため息)くだらないオカルト話かなんか

知らないけど昨日も現場で全く同じ様な事言ってきた

男がいたみたいだね。念の為、お巡りさんが

見に行ったけどそんなの無かったの」

絢斗「え!？」

警察の声「あれ?もしかしてお宅(昨日の)?」

乱暴に通話を切り、険しい表情の

悠馬と見合う絢斗。

絢斗「・・・どういう事だ?」

69 宗祐の家 リビング(夕)

テーブルに突っ伏し、泣いているさゆり。

ふと、その手が宗祐のタブレットに触れる。

さゆり「?」

70 磯野家 表(夜)

セダンが到着する。

7 1 同 1 F リビング

知里の元に仁志がやってくる。

仁 志「勝手に車に乗って、消えただと？」

知 里「電話も繋がらなくて」

仁 志「会社も無断欠勤して。何考えてんだ？」

と、何かを思いついた知里がサイドボードの引き出しを開ける。

知 里「(見て) 鍵が無い」

仁 志「別荘か」

知 里「(慌てて) 行かなきゃ」

仁 志「放っておけ。昨日の事といい、戻ったらタダじゃおかない」

2階へ向かう孝志。

知 里「あなたは・・・私達は何も気づいてなかった」

仁 志「(振り返り) なに？」

知 里「・・・あの子は私たちの手から離れて

自分の夢を追いたいの。それがあの子の希望なのよ」

仁 志「なに？会社辞めるつもりだっていうのか！？」

もう知らん！」

憤慨し、出ていく仁志。

知 里「・・・」

7 2 別荘 1 F リビング外(真夜中)

窓の外、雨が降り出す。

ワインオープナーで開けたボトルをグラスに

傾ける絢斗。

注がれたワインを一気に呷る悠馬。

絢斗も飲もうとすると、突如電気が消える。

絢斗・悠馬「？」

やがて、外から雨音に混じり

パチパチ物音がする。

絢斗・悠馬「(見て)！」

窓外、ウッドデッキの向こうでSUVが燃えている！

絢斗「なに！？」

消火器を手に窓を開け、1人飛び出す絢斗。

悠馬「絢斗！」

デッキの（膝上位の低い）フェンスを飛び越えSUVに消火器を噴霧する絢斗。

と、炎と煙の陰からウサギが飛び出してくる！

絢斗「（驚き）え！？」

絢斗目掛けて、グルカナ이프を真横に

振るウサギ。

咄嗟に前屈んだ絢斗のこめかみにナイフの柄が当たる。

絢斗「！」

消火器を放り、吹っ飛んだ勢いで後方の

雑木林に突っ込むと、その先の坂を

転がり落ちていく絢斗。

悠馬「（見て）絢斗！あいつ、何でココに！？」

悠馬を見据えるウサギ。

悠馬「足バカになっても、オバはんには負ける訳ないわ」

暖炉の火掻き棒を手にする悠馬。

と、ウサギが視界から消える。

悠馬「？」

しばし静寂の後、ウサギが車椅子を押し現れる。

悠馬「（驚き）なんやと！？」

車椅子には、口を塞がれ手足を縛られた瞳が！

瞳「（恐怖で）」

瞳にナイフを突きつけるウサギ。

悠馬「ま、待て！彼女に手え出すな！」

ケラケラ笑い、ゆっくり手招きするウサギ。

悠馬「・・・わかった」

しゃがむと、火掻き棒を静かに床に置く悠馬。と同時に、後ろ手でさりげなくテーブルの

ワインオープナーを手にし、掌の中に隠す。
立ち上がり、右足を引き摺りながら
ウッドデッキに出るとフェンス越しに
ウサギと対峙する。

悠馬「・・・彼女を放せや」

ウサギは、仕草で悠馬に膝をつく様に指示する。
正座し、両手を後ろ手で組む悠馬。
フェンスを越え悠馬の前に立つと、ナイフを
大きく振りかぶるウサギ。

瞳「(絶叫) ！！！」

と、悠馬が隠し持っていたオープナーの
スクリュー部分をウサギの右太ももに突き刺す。
ナイフを落とす、両手で右足を押さえるウサギ。

悠馬「人質なんてセコイ真似しよって。
ていうか、誰や？マスク剥いだる」

立ち上がろうとするが、右足が痛んで再び
膝をつく悠馬。

と、ウサギがナイフに目もくれずによろよると
フェンスを越え逃げ出す。
ナイフを手にし、痛みを堪えフェンスを
越えると瞳の拘束を解く悠馬。

悠馬「(瞳に) 隠れてろ！すぐ戻る！」
瞳「・・・(頷き)」

ウサギを追う悠馬。

× × ×

共に足を引き摺り、逃げるウサギと
それを追う悠馬。

悠馬「待てコラあっ！」

ウサギが足を纏れさせ、倒れ込む。

悠馬「手間掛けさせんなや」

荒い息でウサギを見下ろす悠馬。

悠馬「これ、オバはんのやろ？返したる」

ブローチをウサギに放る悠馬。

悠馬「代わりに、そのマスク剥がさせろや」

悠馬がウサギのマスクに手を掛けた刹那、

悠馬「ぐはあああっ！！」

悠馬が身体を震わせ、硬直したまま

仰向けに倒れる。

悠馬「ぐ・・・な、なん、だ？」

ゆっくり立ち上がるウサギの手には

(亜季の)スタンガン。

悠馬「！！」

ブローチと悠馬が落としたナイフを拾うウサギ。

悠馬「・・・や、やめ、ろ」

7 3 同 雑木林の坂下

悠馬の断末魔に反応し、ハッと目を開ける絢斗。

絢斗「・・・痛っ」

打ち付けた身体の痛みには耐えながら

坂を這い上ると木々の間から別荘の

様子を窺う絢斗。

絢斗「悠馬は？悠馬！」

そこへ、車のエンジン音が響く。

絢斗「？」

ヘッドライトを点けたセダンが

別荘前にやってくる。

絢斗「？」

停車したセダンから知里が降りる。

絢斗「！」

燃え盛るSUVに驚く知里の背後、

右足を引き摺るウサギが現れる！

木立から飛び出す絢斗。

絢斗「(大声で)母さん！後ろ！」

知里「絢斗？」

振り向くと、眼前のウサギに目を見張る知里。

知里「(絶叫)!!!」

セダンへ駆ける知里。

絢斗「おい！こっちだ！来いよ！！」

ウサギを誘う様に別荘の中へ駆ける絢斗。

知里はセダンに乗り込み、ドアをロックする。

知里「(パニックで) 絢斗!!!」

7 4 別荘 1 F リビングへ階段

リビングに飛び込み、階段を駆け上がる絢斗。

7 5 同 2 F 一室

部屋に飛び込む絢斗の視線の先、壁に掛けられた狩猟用ライフル。

7 6 同 外

震える手で110番する知里。

知里「とにかく、すぐ来てください！」

ウサギが、SUVの炎を燃え移らせた暖炉用の薪を別荘の中へ放る。

知里「(見て) 絢斗！」

7 7 同 2 F 一室へ廊下へ1 Fリビング

引き出しにあった2発の弾を詰めると

ドアに向けライフルを構える絢斗。

絢斗「(息を呑み) 来いよ……」

突然ドアが大きく開く。

絢斗が引き金を引き、轟音が響く。

が、無人のドアの向こうから煙が

大量に流れ込んでくる。

絢斗「燃えてる！？逃げ場無くす気か？」

呼吸が苦しくなり息を止めると勢いよく廊下に出る絢斗。

そこへ黒い影が迫る！

絢斗「うわあああっ！？」

後ろに飛び退きながら、反射的にライフルを放つ絢斗。

目の前にウサギの姿はなく、ナイフが落ちていく。

慌ててライフルを放り、ナイフを手にする絢斗。

絢斗「（見直し）くそっ、どこ行った！？」

急いで階段を駆け下りる絢斗。

絢斗「うわっ！」

リビングは、火の手に包まれている。

絢斗「（愕然として）だ、駄目だ……」

と、炎を掻き分ける様に消火器を噴霧させる知里が現れる。

絢斗「か、母さん！？」

絢斗の逃げ道を作るべく、必死に

消火器を撒く知里。

知里「絢斗！早くこっちに！！」

母の元へ駆け出す絢斗。

と、焼け落ちた天井の梁が知里の上に落ちる。

知里「！？」

梁の下敷きになる知里。

絢斗「う、うわああああっ！！母さん！！！！」

梁を持ち上げようとする絢斗。

が、絢斗1人の力ではとても持ち上がらない。

絢斗「くっそおとおおおっ！！」

知里が熱さと痛みに顔を歪めながら息子を見据える。

知里「……に、逃げなさい」

絢斗「！？な、なんで来たんだ！？」

知里「あ、あなたを守る為に決まってるでしょ……」

絢斗「！お、俺のせいだ！」

俺があんな事しなきゃ！！」

知 里「・・・」

斗「ごめん母さん！俺、人を殺しかけたんだ！

だからこんな事に！これが俺の本当の姿なんだよ！」

優しく微笑む知里。

知 里「そ、宗祐君の事件を見て、あなたが

何かしたんじゃないか？って思ったわ」

知 斗「！！」

知 里「・・・けど、あなたが何をしても、

私はあなたの味方・・・母親だから」

知 斗「！！」

天井が崩落してくる。

7 8 同 外

外に転がり出る知斗。

知 斗「（見て）！！」

別荘が、完全に火に包まれる。

知 斗「母さーん！！」

無き咽ぶ知斗の背後で、ケラケラ笑う声がある。

知 斗「！！」

振り返る知斗の視線の先、右肩から血を流した

ウサギが沼田・宗祐・悠馬（の頭）それぞれ

髪の毛を掴み、一束ねにしてぶら下げている。

知 斗「悠馬！？てめえっ！やっぱりあの伝説を！？」

ウサギはバンに乗り込み、走り去る。

知 斗「待てよ！絶対殺してやる！！」

セダンに乗り込み急発進する知斗。

その様子を、木陰に隠れた瞳が怯えた

表情で見ている。

瞳 「・・・」

7 9 走るセダンの中

前方にバンは見えない。

絢斗「あいつ、あの木に誘ってんだ……」
と、助手席に置かれたモノに気付く。

絢斗「(見て)！」

それは(知里が取り寄せた)服飾専門学校の
パンフレットと絢斗のスケッチブック。

絢斗「(涙が溢れ出し)母さん!!!」

ハンドルに頭を叩きつける絢斗。

80 真夜中の町 情景

雨の上がった夜明け前の蒼い空。

81 真久公園 入口

歩く足元が止まる。

前方に香月が立っている。

足元の主、かおるが怪訝な表情を向ける。

かおる「香月さん、どうしたんだい？」

香月「……いや」

怪訝な表情で去っていくかおる。

と、別の方角からバンが現れる。

香月「……」

停車したバンから、3つの頭を一束ねに掴んだ
ウサギが降り立つと、香月と対峙する。

香月「……彼女の遺体が今朝見つかった。

私が無事に埋葬するよ」

ポケットから出した(母子の)写真を

香月に手渡し高台へ向かうウサギ。

その様を苦渋の表情で見送る香月。

香月「……」

82 真久公園 (回想…2か月前)

かおるら、ホームレスが

並んでいる炊き出しの列。

レインコート姿の女Ⅱ米川 絹江（55）に

カレーを盛る香月。

絹江「ご飯はそんなに要らないよ」

香月「駄目だよ絹江さん、沢山食べなきゃ（笑）」

と、絹江の後ろに並ぶ青年（19）に気付く。

香月「見ない顔だね？」

男「……すみません」

香月「（笑って）謝る事はないよ。名前は？」

男「……石田賢治です」

× × × * 数日後

ベンチに並んで座る香月と賢治。

香月「なあ？こんな事聞くのは野暮かもしれないが、親は？」

賢治「……母がいます」

香月「君は気持ちのいい青年だ。」

賢治「お袋さんの元へ帰ったらどうかかな？」

賢治「……帰れません」

香月「なんで？勘当でもされたのか？」

賢治「僕が父を殺してしまっただんです。」

香月「悲しむ母を見るのが辛くて」

賢治「？」

賢治「車の事故で。僕が運転していて、助手席にいた父を……」

突然、2人の前にコップ酒を手にした絹江が現れる。

絹江「私は、娘を飲酒運転の車に殺された」

ポケットから、若き日の自分と幼い娘との

写真を取り出し、見つめる絹江。

絹江「お父さんに会いたいだろ？」

賢治「はい。でも、そんな事、無理ですけど」

絹江「無理じゃない」

賢治「え？」

高台の逆さ帯を見上げる絹江。

絹江「けど、相当の覚悟がいる」

賢治「覚悟？」

絹江「そう。4つの人の頭をー」

香月「(遮り) 絹江さん、もうよしなよ！」

(賢治に) ちよっとこの人、オカルト好きっていうかわわり者で変な事ばっか信じてんだよ」

不満そうな表情で、酒を呷る絹江。

香月「(ため息) そんな事より、お袋さんは君の事

恨んでるのか？」

賢治「……いえ。母が僕を責める事はありませんでした」

香月「(頷き) 君を愛してるんだ。帰ってやれ」

賢治「……」

× × *時間経過

公衆電話で話している賢治の背中を見守る

香月と傍で酒を飲む絹江。

そこへ、紙袋を手にしたボランティアの

沼田が現れる。

香月「沼田君、買い出しお疲れ様」

沼田「(会釈して) 絹江さん、また昼間っから酒？」

絹江「酒屋の前に品卸しのカゴがね」

香月「この前差し入れたろ？ダメだよ、そんな事しちゃ」

沼田「(笑って)」

去っていく沼田と入れ替わる様に

賢治が戻ってくる。

香月「お袋さん、何だって？」

賢治「(恥ずかしそうに) 今夜、帰ります」

香月「(笑って) そりゃよかった」

ポケットからラッピングされた箱を

取り出す賢治。

香月「(見て) それは？」

賢治「腕時計です。母の誕生日に買ったんですけど

渡せぬまま家を飛び出してしまったので。

帰ったら改めて渡します」

香 月「……お袋さん、きっと喜ぶよ（笑）」

8 3 真久公園（現在） 入口

香 月「……」

そこへ、絢斗が現れる。

香 月「……そんなモノ持って何をしてる？」

絢斗の持つナイフに目をやる香月。

香 月「仲間と3人で、ホームレスの女性を

追いかけたのは君らだな？」

絢 斗「（ドキッ）な、なんで（それを）！？」

香 月「俺はここでボランティアをしてる。

あの晩、彼女の後を尾ける3人組の影が見えた。

その次の日、殺された君の友達が誰かを探す様に

この公園に現れた。

絢 斗「……君と関西弁の彼が繋がっていた。単純な推測さ」

あいつは俺たちに復讐してんだ！

俺の母親もあいつのせいだ！」

目が血走る絢斗。

絢 斗「逆さ帚の伝説だ！あの女は信じてる！

俺の仲間とボランティアを殺して首を切って！

4つで終わる！後は俺だ！

俺を殺れば伝説の完成ってわけだ！」

香 月「……それは違う」

絢 斗「なんだと！？」

香 月「あの木に行けば分かる」

絢 斗「……」

8 4 同 上の高台 逆さ帚の下

木のたもとに掘った穴に、ビニール袋から出した沼田・宗祐・悠馬の頭を置くウサギと、背後に絢斗が現れる。

振り返り、立ち上がるウサギ。
絢斗「てめえっ！何モンだ！？そのマスクを取れ！！」
ウサギがゆっくりマスクを脱ぐ。

絢斗「（見て）え？」

絢斗と対峙するウサギの正体。陽子。

その様子を香月が陰から見ている。

香月「・・・」

8 5 真久公園（回想） * S 8 2 から数日後

ボランテИА活動をする香月の元へ

女性（陽子）が。

陽子「あの、石田賢治という人を探してるんですが・・・」

香月「もしかして、賢治君のお母さんですか？」

陽子「（驚き）え？あ、はい。賢治の母で石田陽子といいます」

香月「お母さんの元へ帰ると言ってたんですが

戻ってませんか？」

陽子「・・・ええ。ここにいと本人が

言ってたので（来たんです）」

× × × * 更に数日後

香月らボランテИАに混じり、炊き出しを

手伝う陽子。

香月「陽子さん、もう慣れたかい？」

陽子「まだまだです。けど・・・」

香月「ああ。ここにいれば、賢治君に会えるさ。

きつと照れ臭くなっただよ」

陽子「・・・はい」

8 6 真久公園 上の高台 逆さ帯の下（現在）

香月「・・・」

絢斗「何で？何であんたがこんな事を！？」

陽子「この男は息子を殺した」

沼田の頭を見つめる陽子。

絢斗「!?!」

香月「・・・・」

87 真久公園（回想） * S 8 5 から数日後

炊き出しを行う香月がふと目をやると

沼田が見覚えのある箱を若い女に

渡しているのが見える。

香月「？」

× × × * その日の夜

香月が、沼田と対峙している。

香月「なあ。昼間、女性にラッピングされた箱を渡してたあれは？」

沼田「え？ああ、プレゼント。腕時計ですよ」

香月「・・・・あれは賢治君がお母さんの為に買った物だ」
沼田「・・・・」

無言の後、諦める様に笑うと煙草を啜え
火を点ける沼田。

香月「・・・・あの子を知らないか？」

沼田「俺は知りませんよ。まあ今頃、世の為人の為にも
ならないホームレスが役に立ってるといいですよね」

香月「なに？」

沼田「知ってます？年寄りで身体悪いけど金を腐るほど
持ってるお金持ちが、若くて健康な人間の臓器を闇で
買い取るって話があるらしいですよ」

香月「（ゾツとして）まさか？」

沼田「やだな。そういうのって身寄りの無い若い人間が
狙われるから賢治君もそうになってなきやいいな、
って話ですよ」

香月「（息を呑み）あの子を無理やり？」

沼田「(凄み) おいおい。証拠も無いのに変な事言うと訴えますよ？」

それより俺は、あんたが親身になってる絹江さんが警察に追われてんの知ってるんですよ」

香月「！」

沼田「(笑って) 娘を酔っ払い運転で殺した奴を包丁で襲ったんですよね？」

香月「(驚いて) 絹江さん」

香月「……」

沼田「あんたがバカな事言うなら、こっちもやる事やりますよ？」

悪びれる事無く、去っていく沼田。

香月「(悔しくて)」

香月の元へ絹江がやってくる。

香月「(驚いて) 絹江さん」

絹江「……全部聞いたよ」

香月「この事は黙っておくんだ。」

陽子さん、そしてあんたの為に」

×

×

×

*後日

香月の元に、虚ろな表情をした陽子がやって来る。

香月「陽子さん？」

陽子「……本当ですか？」

香月「え？」

陽子「賢治が殺されたって本当ですか？」

香月「！」

陽子の傍らに絹江がやってくる。

香月「絹江さん！あんた、まさか！？」

絹江を問い詰める香月。

香月「言うなっって言っただろ！？」

「なんでこんな馬鹿な事を！？」

絹江「私は、この人の為に教えたんだよ」

香 月「……陽子さん」
膝から崩れ落ち、身を震わせて慟哭する陽子。

× × ×*更に後日

遠くで、炊き出し準備をしている沼田を睨むと
陽子の元へ向かう香月。

香 月「……陽子さん、警察へ行こう。」

沼田を逮捕してもらうんだ」

陽 子「そんな事したら絹江さんが。それに警察なんかに
渡したらダメですよ」

香 月「？」

ふらりと高台へ向かう陽子。

香 月「陽子さん？」

心配で後を追う香月。

香 月「(愕然)!!!」
と、陽子が笑顔で『逆さ帚』に魅入られている。

8 8 真久公園 上の高台 逆さ帚の下 (現在)

香 月「……」

絢 斗「宗祐も悠馬も、俺だってあんたには
何もしてねえだろ!？」

にっこり笑う陽子。

陽 子「あなた達は私に生きる希望をくれた人を……
同じ母親である、あの人の命も希望も奪ったから」

絢 斗「母親? 希望? 殺したって!？」

8 9 廃墟のビル 階段踊り場 (回想)

レインコートの女Ⅱ絹江を残し、階上に向かう
絢斗と悠馬。

と、そこへ陽子がやってくる。

陽 子「絹江さん、絹江さん」

陽 子「あなたが追われているのを見てね。
でも、ごめんなさい。途中で見失っちゃって」

絢斗の銃を拾うと絹江に肩を貸し
階段を降りる陽子。
・ ・ ・ やがて、絢斗達が見た無人の光景に。

9 0 真久公園 人気のない一角（回想）

絹江に肩を貸し、やってくる陽子。

陽 子「本当に病院行かなくていいの？」
絹 江「ここにいさせて」

高台を見つめる絹江をゆっくり仰向けに
寝かせる陽子。
陽子の持つトートバッグから、血まみれの
衣服とウサギのマスクが見える。

絹 江「・・・ウサギ？」

陽 子「小さい頃、賢治が好きだったの」

絹 江「・・・沼田を殺ったんだね？」

陽 子「（笑顔で頷き）4つ首を埋めれば、賢治が
帰ってくるんだもの」

絹 江「凄いわね。私も娘を殺した男を殺そうとしたけど
出来なかった」

ポケットを探る絹江。

絹 江「娘の写真、落としちゃったみたい。

ああ。あの娘の顔が見たいわ」

陽 子「・・・」

絹 江「あなたには勇気を貰った。

あんたの後には今度こそ私も・・・」

陽 子「（にっこり笑って）出来るわ。2人で希望を叶えるのよ」
頷くと、ゆっくり目を閉じ、息を引き取る絹江。

陽 子「・・・仇は討つから」

絹江のレインコートを脱がして羽織ると
彼女を物陰に隠してその場を去る陽子。

絢 斗「（ハッととして）今朝ニュースでやってた遺体があの女か！？」

陽 子「・・・・・・・・」

絢 斗「・・・・・・・・あんたら狂ってる！」

笑顔が次第に狂気を帯びていき
ケラケラ笑い出す陽子。

絢 斗「（ゾクッ）」

陽 子「狂ってる？子供の為なら母親は幾らでも狂ってやれる。もし子供がどんなに悪い事しても、許してあげられる。だから、あなたのお母さんだってあなたを助けに来たんでしょ？」

絢 斗「！言うな！！」

スタンガンを向け、右足を引き摺りつつ
絢斗に近づく陽子。

陽 子「お母さんも本望だと思おうわ。」

絢 斗「大事なあなたの為に死ねたんだから」

陽 子「・・・・・・・・やめろっ！」

陽 子「あなたはそんなお母さんを愛してた？私の息子は私を愛してくれた。私も息子を愛してた。私のたった1つの希望だった」

絢 斗「やめろって言ってんだろ！！」

陽 子「お母さんも、あなたの事は何物にも代えがたい希望だったはず」

絢 斗「！！黙れえええっ！！！！」

香 月「（止めるか逡巡して）・・・・・・・・」

絢斗がナイフを振りかぶる刹那、
逆さ帚を見上げる陽子。

陽 子「（笑顔で）賢治・・・・・・・・」

陽子の首が鮮血と共に匆ね飛ぶ。

絢 斗「（動きが止まり）！！！！？」

頭を失い倒れ込む身体の背後

鉤 鉤を持った亜季がいる。

鉤 斗「！！？」

香 月「！！」

亜季「・・・ば、バカね。止め差さずに置き去りにしてくなんて・・・死んだと思った？」

香 月「？」

返り血を浴びた亜季が怒り狂った目で
陽子の首を見下ろす。

鉤 斗「！！」

亜季「あんたも翔太と同じ首無し！

息子の仇だああっ！！」

鉤 斗「息子！？あんた、記者ってのは（嘘か？）」

踵を返し、逃げ出す亜季。

鉤 斗「！！おい！？」

そこへ香月が飛び出し、亜季の頭を
殴り気絶させる。

鉤 斗「！！」

昏倒し、倒れる亜季。

陽子の首に視線を向ける鉤斗。

鉤 斗「（香月に）あ、あんた。この人が犯人だって

知ってたのか！？」

香 月「これ以上、こんな事をさせない為にここに来た」

鉤 斗「こ、こんなバカげた話・・・バカげてるだろ！

こんな事！！」

香 月「平和に生きてれば、誰だってこんな事バカらしいと
思うよな？ 笑い飛ばすよな？ けど、他人にどう映ろうが

それが叶わなくて無駄な事だと分かっても

彼女たちはこんな希望に縋るしかなかったんだ」

鉤 斗「！！」

香 月「詫びる気持ちがあるなら、彼女の頭を埋めてやれ」

鉤 斗「え？」

香 月「伝説の最後、知らないんだな。

4 つ目は自分の頭を捧げるんだ」

鉤 斗「！！」

香月「彼女は、君に殺されるつもりだったんだろう」
絢斗「！だから俺をここに誘って？」
香月「な、なんで自分の命を！？」
絢斗「彼女が言ったろ？母親は子供の為なら狂えるんだよ」

×

×

×

身を挺して自分を守ろうとした
知里の優しい表情。

×

×

×

やがて震える手で、陽子の頭を3つの頭と
共に並べる絢斗。

絢斗「……母さん。会いたいよ、会いたいよおおっ！」
香月「……」
激しい慟哭と共に、一心不乱に穴を埋める絢斗。

9 1 真久公園（数日後）

ベンチに座り、沈痛な表情でスマホニュースを
見ている瞳。

画面には『謎の連続猟奇殺人。4つの首で
死者が復活？事件に関与した青年は錯乱。
精神鑑定へ』とある。
遺体で見つかった絹江の素性に関する
記述もある。

瞳 「……」

そこへ香月がやってくる。

瞳 「（見て）香月さん」

×

×

×

ベンチに並んで座る香月と瞳。

瞳 「じゃあ、陽子さんは息子さんの為に？」

香 月 「ああ。沼田が殺された晩、この辺りでホームレスの誘拐未遂があった。犯人は沼田だ。あいつは臓器売買に加担して賢治を誘拐し、殺した。」

瞳 そして、あの晩も新たな生贄を探してたんだ」

瞳 「・・・」

香 月 「俺は、叶う筈のない希望を求め破滅に向かった彼女を止める事が出来なかった」

瞳 「・・・陽子さん、いえ母親って凄いですね。」

香 月 「私も自分の子供がそんな理不尽な目に遭ったら」

瞳 同じ事してたかも。まあ、なりそびれましたけど」

瞳 月 「？」

瞳 「妊娠してたんです。」

香 月 「私は生みたかったけど、共に学生だった彼は」

瞳 動揺するばかりで。彼の親や自分の親」

香 月 「みんなに大反対されました。それでー」

瞳 月 「(察して)・・・」

瞳 「彼と別れて大学も辞めて、あの子に許しを請う様に」

香 月 「人助け・・・ボランティアを始めたんです」

瞳 月 「・・・これ、彼女が持ってたんだ」

香 月 「ポケットからブローチを出す香月。」

瞳 「(少し驚き) 私がプレゼントしたんです。」

香 月 「旦那さんを失くしたって聞いて」

瞳 ブローチを見つめる瞳。

瞳 「それ、私の好きなシオンという花をモチーフに」

香 月 「していて。花言葉は『追憶』なんです」

瞳 月 「・・・」

瞳 「陽子さんは、私の事気づいてたみたいですね。」

香 月 「だからきつと・・・」

×

×

×

(別荘) 車椅子に瞳を縛り付ける陽子。

陽子「(夢く優しい笑顔で)ごめんさい。
あなたに危害は加えないから」

香月「……同じ母親と知ってたから、
手になかなかつたんだな」

×

×

×

亜季「……ば、バカね。止め差さずに
置き去りにしてくなんて……死んだと思った？」

×

×

×

香月「……」

瞳「(頷き)私、いつかもう一度お母さんになりたいです」
香月「……きつと叶うよ(笑)」

瞳「(哀しげに微笑んで)」

と、高台から吹いた心地よい風が
香月と瞳の頬を撫でる。

香月・瞳「……」
高台を見上げる香月と瞳。

9 4 同 上の高台 逆さ帚の下

木のたもとに、季節外れの小さな花が
咲いている。

そこへ、虚ろな目の女性(宗祐の母)
さゆりがやってくる。

さゆり「(見上げて)……」

E N D